

～同推だより～

出 会 い

【編集】

散岐地区同和教育推進協議会

【発行日】

令和8（2026）年2月25日

《第36号》

【用語解説】



■ 若年性認知症

認知症は高齢者の病気だと考えられがちですが、若い世代で発症することもあります。65歳未満で発症する認知症を「若年性認知症」といいます。若年性認知症は、早期発見をし、適切な治療を行うことで進行を遅らせることも期待できますし、体力的には社会参加が可能なので、家族をはじめ、職場や地域の理解と支援が大切です。

■ 同和問題

同和問題は、わが国固有の人権問題です。昭和40（1965）年に同和对策審議会答申が出され、同和問題の早急な解決こそ国の責務であり同時に国民的課題であることが示されました。しかし、結婚差別や就職差別などの根強い差別は今も残っています。私たちは、正しい認識を持って、今なお残る同和問題に向き合っていくことが大切です。

■ LGBT

性のあり方にはある決まった「普通」があるのではなく、「普通」と思われていることも、いろいろな性のバリエーションの一つです。レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの頭文字をとってLGBTと呼びます。LGBTは性的マイノリティという言葉でも表現される少数派で、「普通じゃない」と排



座談会の様子

除されたり、からかいの対象にされたりすることがあります。多様性を尊重し、認め合い、一人一人が自分らしく生きられる社会を目指すことが大切です。

人権と多様性を学ぶ

日常の中のさまざまな人権問題について話し合う小地域座談会を、昨年11月に全8集落で開催しました。

今回は、人権啓発DVD『光射す空へ』を視

人権・同和教育小地域座談会

聴後、話し合いを深めていただきました。DVDのあらすじ・用語解説や参加者の意見・感想をお読みいただき、人権問題を自分事として学びを深めていただければ幸いです。



大学生の有吉朝陽には、悩みがある。父の和正が**若年性認知症**と診断されたのだ。和正は会社を休職中。母の典子は明るく振舞っていたが、朝陽は記憶や理解力を失っていく父に苛立ちを隠せない。何でも話せる幼なじみの颯太だけが心の支えだ。その颯太もまた、生きづらさを感じていた。

朝陽は、大学の同級生・優海と共同で「自分がよく知らない人権問題」について調べ、レポートを書くことになった。2人が選んだ課題は、「**同和問題**」。何の知識もない朝陽は、インターネットで同和問題の歴史や現状について調べるが、情報の中には、同和地区の人々に対する誹謗中傷もあり、何が真実なのかわからない。朝陽と優海は、井上教授に相談。田中時恵という女性を紹介してもらう。時恵は自宅を訪れた2人に、自分が受けた結婚差別について語る。朝陽は優海とともに噂や偏見に惑わされずに自分自身で正しく知

ること、人と向き合うことの大切さを学ぶ。

夜中に和正が家から姿を消した。颯太とともに、公園にいる和正を見つけた朝陽は、そこで認知症になっても失われない父の誇りと愛情を知るのだった。和正は、職場の理解を得て仕事に復帰。朝陽と典子は家族として和正に寄り添い、胸を張って生きていく決意をする。

颯太が突然、優海に自分が**LGBT**のT、トランスジェンダーであることを告白する。これまで打ち明けたのは朝陽だけ。自分の家族にすら言えなかったことだ。優海に告白したのは、「普通」とは違う自分のことを他の人に理解してもらうための第一歩だ。優海は戸惑いつつも、颯太という人間をあるがままに受け入れる。そんな優海を見て、朝陽も父のことを打ち明けるのだった。

梅雨が明け、空に光が射す頃。人権問題に関するレポートを提出する朝陽と優海。それを読む井上教授の顔に笑みが浮かんだ。

- 認知症傾向の家族がいるが、車の運転をしていることが心配である。
- 耳が遠い家族がいるので、会話が難しく筆談をしている。
- 認知症について、座談会を通じて様々な体験談や意見を聞くことができた。
- 人権にも様々な形があり、正しく知ることが

必要だと感じた。

小地域座談会

●意見・感想●



- 自分の目で見、考えて行動することが大切である。

- 地域のコミュニティが大切だと感じる。
- 自分自身が噂や偏見に惑わされることなく、誰もが人権が尊重され、自分らしく生きられることができる社会について考えることが大事である。
- カミングアウトは怖い、一歩を踏み出すことが大切だと思う。

山里のお寺で学ぶ

人権啓発視察研修

本年度の人権啓発視察研修は、11月22日(土)に八頭町南の浄土真宗本願寺「光澤寺」で15人の参加者のもと、開催しました。

境内を歩いて本堂に入り、まず驚いたのは、永代供養の納骨堂が多く設置されていたことです。核家族化が進み、墓を管理して守る人がいなくなったため、墓じまいをして納骨堂で永代供養を申し込まれる人が増えているそうです。家族壇、個別壇のほか、境内では樹木葬ガーデンもありました。

また、本堂に入れば、普通、多くの寄附・寄贈者名が掲げられますが、一切ありませんでした。

このお寺では、葬儀・法事・永代供養はもちろんのこと、「宿坊 光澤寺 やすブータン村」と名

付け、食事と宿泊、写経、読経、瞑想などの体験をすることもでき、本堂深夜バーもあります。私たちは、昼食として、おしゃれな「イタリアン精進料理」をいただきました。

さて、宗元英敏住職のお話は、仏教の観点からさまざまな示唆をいただきました。中でも、日常を離れて心と体を休めることで、自分自身を取り戻す宿坊体験者のお話は、普段、時間に追われながら余裕のない生活を送っている私自身の生き方を見詰め直す機会となりました。

心にゆとりや安らぎがなければ、自身や相手も大切にすることはできません。人権尊重社会を目指す一人として、地域の中で人と人とのつながりを心がけ、相手の心に寄り添えられるよう努めていきたいと実感した有意義な時間でした。

(中村 晃)



精進料理に舌鼓

～編集後記～



2月上旬に降った大雪も平野部ではすっかり溶けて、少しずつ春に近づいていることを実感しています。

さて、ミラノ・コルティナ冬季五輪では、日本をはじめ、世界の選手の躍動する姿に心揺さぶられました。スポーツの持つ力の偉大さを改めて感じました。

五輪は、『平和の祭典』とも言われますが、一方、地域によっては、戦争や紛争、疫病等により尊い生命を奪われ、傷つき悲しんでいる人たちがいることも忘れてはいけません。

国内外とも激動する時代の中、私自身、紙面を編集する中で、様々な人権に関する多様な意見に触れ、考えることができることに感謝しています。

今後もこの「同推だより」が地域の方々の目に触れて読まれ、人権について身近に考えていただく機会となれば幸いです。

(T. O)



法話の様子